

ジョン・ミューア：ヨセミテアルパインツアー-2014年7月24～31日



ウィキペディアで調べると、「ジョン・ミューア (John Muir, 1838年～1914年) は、ナチュラリストの草分け。作家で植物学者、地質学にも精通し、シエラネバダ山脈の地形が氷河作用に深く関わっている事を発見した。」という書き出しで説明している。さらに『自然保護の父』と言われた。ヨセミテ渓谷から端を発する「ジョン・ミューア・トレイル」は彼の業績を記念し造り上げた遊歩道である。第26代大統領セオドア・ルーズベルトはミューアの情熱に心を動かされ、今に繋がる国立公園の理念を確立させていった。また、ミューアは「自然の保護は、自然を知るところから始まる」思いから、多くの人を森に誘い出し、自然教室を開くなど、その素晴らしさを体験させて、「自然と人間との共生」を説いた。」と続けている。ジョン・ミューア・トレイルはきちんと全部歩くと、全長は340kmあり1ヶ月かかるそうである。(以上ウィキペディアから引用) そこを日本からはるばる来た年金生活者一団が2泊3日でもいいとこどりしていこうという算段である。バブル期を生き抜いたワレワレのシタタカさは太平洋戦争勝者を相手にしたって怖気付くものではない。

成田からサンフランシスコまでは9時間とちょっとであり、今まで経験したアメリカ行の中では短い。しかしこの日一日がとてつもなく長いことには変わらない。成田を出たのが午後5時なのにサンフランシスコは午前10時に戻ってしまった。空港に迎えてくれた現地ガイドのジャックは、お父さんが元軍人で日本のいろいろなキャンプを転勤して歩いたのについて回っていた、ということで日本語はペラペラである。メンバーは8人+アルパ

インツアーの鈴木健介さん。ただし客の中で男は私一人。またまた全ババ連に囲まれての山行きである。まあウハウハ登山は、3月の香港もそうであったし、2006年のカナダ・アシニボインと1996年のニュージーランドのMt.クックなど、過去にたくさんの経験を持つ。15人乗りくらいの大型専用車はトレーラーをつけていて、すぐにサンフランシスコを出発。これを運転するのは一昔前にデュエットで慣れた“ヒデとロザンナ”のロザンナ似のアンジェラである。ジャックと同じ会社に属していて、ガイドとして山歩きをすることもあるが、今回は運転手に徹するようである。ボランティアと英語教師で2度の日本経験があつて、こちらも日本語ペラペラだ。9時間強の飛行のあとに7時間強のドライブはこたえる。まあ寝ていればいいと言えばそれまでであるが、結構ハードだ。ホテル到着は16時30分。



トレーラー付き専用車



ジャックとアンジェラ





ジョン・ミューア・トレイルはいわば遊歩道であるので必ずしも山頂は通らない。道幅はふつうの山道程度の広さしかない。この日からは山岳ガイドとしてジェーンが先導役をする。日本の山ガールも目を回すようなピンクのスカート姿である。彼女の言によれば“この方が comfortable (心地よい)” だそうだ。「うん、見る方も comfortable」である。この時期の月間降雨量は 2mm であるということで空気は乾燥しているが緑は多い。樹林帯かと思えば高山植物の咲き乱れるお花畑になり、さらに高いところにまた樹林帯があったりする。ここでは森林限界というものがない。高山植物は昨年アメリカン・ロッキーのグレイズピークで見たインディアンペイントブラシ、アズマギク、イワベンケイ、オダマキなど同じようなものが咲いている。ただしこのオダマキは赤い色をしていて、日本のものより一回り大きい、こんなのは初めて見る (英語名 **Columbine** : コロラド州の州花である)。山容はとにかく広々している。ただただ広いところを我々は 3 日間かけて歩くわけであるが、その途中にエスケープルートはないようであるので、最低 3 日間は歩かなければなら



赤いオダマキ



インディアンペイントブラシ



Mt.デイビスなどの高峰群

ない。アメリカでは超有名なコースであるということであるが、人の数は案外少ない。湖越しにMt.デイビスなどの高峰群が見渡せる。ジェーンとジャックのガイドたちはこういった景色についてちっとも説明を加えてくれない。ジェーンは放っておくとどんどん先へ行ってしまって、ヒマラヤなどのガイドのようにきめ細かく客の様子を伺うようなことはない。ジャックは2番目を歩いて客のペースを保つ役割を果たしている。つまり二人で一人前といった感じである。午後5時前にテント場に着く。すごくたくさん歩いた感じであるが、朝のスタートも8時半過ぎであるから実働はそれほどでもなく、第一日没が8時過ぎであるから、のんびりしている理由もわかるが、タイムペースが日本流とかけ離れているということで、なんとなくすっきりしない。テントも自分達で張る。山の経験は豊富である全ババ連もテント張りには弱いようだ。役たらずの俺もこの時だけは役に立った。疲れていたがそんなことも忘れてなん張りものテント張りに精をだした。“テントを張り終えて初めて到着である”というテント生活の鉄則を思い出す。食事はジェーンが一人で作ってくれる。この夜はスープとパスタである。喉の通りが良いのでまあ満足だ。

この夜、満天の星を見た。この10年くらい、目が悪くなったせいで満天の星を見ることができなくなっていたが、降るような星がつかみ取れるのではないかと思えた。人工衛星もゆったりと流れていった。



第2日目は標高 3360m のドノヒューパスを超える最もきつい日である。それでも朝のスタートは7時半くらいでアメリカペースである。我々の荷物はミュールと呼ばれるラバ（見た目には馬にしか見えない）が運んでくれる。他のアメリカ人のハイカーはほとんど大きな荷物を自分で担いでいる。我々金満日本人は、山登りというものはこういうふうにするのが当然よといった感じで歩



スカートのジェーンとミュールの荷運び

いている。もう一回アメリカと戦争したらまた負けるなあ。途中、我々の荷物を積んだミュールに抜かれる。ジェーンが馬使いと永い打ち合わせを交わしている。あのスカートの下はどうなっているのか、休み時間に大股開きで座っているところを覗き込んだら、ジーンズ地と思えるしっかりしたショートパンツで保護されていた。炎天下、わずかにある木陰で休憩をとっている時にアメリカ人のグループも近くで休憩をとっていた。ジャックが彼らと話していて、“彼らもみんな 60 歳以上だって”と説明してくれた。早速私が調子に



ドノヒューパスの途中

乗って、“I am seventy, but my mind is seventeen”と言ってやると、みんなニコニコしながら拍手をしてくれた。結構いい奴らジャンか、日米間の和解成立だ。ドノヒューパスの下までは案外あっさり来たので、“たいしたこと無いよ”と思ったら大したことあった。普通日本の山では標高差 300 m上がるのに1時間かかると計算すると、まず当たらずとも遠から



ドノヒューパス

ずになる。しかしアメリカの大地は広い。1時間歩いたって200m上がるのが精一杯である。ドノヒューパスに着いたら、あとはチョイチョイと下るだけだと思ったら、ジェーンは休憩も取らずにどんどん下ってしまう。何焦ってんだよと思ったが、先ほどの馬使いとの永い打ち合わせの秘密がここにあったのかもしれない。下りきって沢沿いの道に出たので、すぐにキャンプ地かと思ったらなかなか着かない。ジェーンはキャンプ地を確保するために先に行ってしまった。5時を廻ってもまだ着かない。鈴木リーダーは本体を停めてジェーンを探しに行った。気の短い元パーマ屋のバアサマが“あたしが探してくる”と言って一人で行ってしまった。ジャックは動かないほうが良いよと座り込んでいる。まあ、野原状のところであるから心配いらないが、山のパーティーとしては遭難パターンの行動である。6時に近づいてきた。ようやく鈴木さんがジェーンとの話をつけて戻ってきた。ジェーンは沢を挟んだ向こう岸にテント場を確保したのである。この沢は結構深くて幅もあるが場所によっては浅いところもある。鈴木さんが靴を脱いで裸足になって渡ってみて、苔むした岩が多く滑りやすいので渡るのには困難と判断した。しかしジェーンは、“なによこのくらい、簡単に渡れるじゃないよ”といった感じで夕食作りなどさっさと自分の仕事に戻ってしまう。こんな時日本のガイドであったならば、自分が下流側に位置して客の手をサポートして渡らせるようなことをするのであろうが、アメリカのガイドにはそのような意識はないようである。鈴木さんが出した結論は馬による沢渡りであった。今までリーダー陣の不統一にブーブー行っていたババア連がとたんにニコニコして、“それでは男の人が最初に行っておね”とき



馬による沢渡り

た。尻込みしたのでは沽券に関わる。ちゃんと鞍をつけた馬を用意してくれたのでなんとかはなったが、馬に乗るのはこれが初めてである。馬が道から水に入るときには頭をグッと下げるので、落ちこまないようにそれに合わせて股をグッと引き締める。渡り終えて馬から降りた時にはホッとした。一人を除いてみんな初体験であったようだ。

この日の夕食は20時、就寝は21時。えらく遅く感じるのはオレだけかなあ。

この夜の星も綺麗であったが、高さが少し低くなった分だけ星のまたたきはなくなった。



3 日目は沢沿いに下るだけであるが、まだ距離は長い。

山形から来たというアメリカ人と出会う。後から義理の兄という日本人が来た。この人のお姉さんを嫁にもらったということか。60歳はとっくに超えていると思えるが、26泊で踏破する予定という、日米義兄弟コンビ、すごい。

この日のコースは水も豊富で緩やかであるので、山歩き以外の遊歩道探索者も多かった。



ヨセミテ

ヨセミテ国立公園は東京都の面積よりも大きいという。ここからはジェーンと別かれて、再びアンジェラの運転で案内してもらおう。山火事があったということで、前日は30分の移動時間が4時間になった。山火事は消さないで燃えるに任せるそうである。山火事も自然生態系の一部であるという。勝手な予防処置をしてしまうと、むしろ生態系を壊すことになるという考え方らしい。

宿泊はテントキャビンとなっていたので幌付きトラックにでも寝かされるのかと思ったら、ちゃんとしたコテージであった。テント形式もあったが旅行社が奮発してくれたらしい。トレールとは違って、誰もが気安く車で探索できる場所であるので、食堂などは家族連れと思われる人たちが溢れかえっている。

ヨセミテ名物の一つに挙げられるのが御影石で作られた岩壁であろう。多くのロッククライマーが挑戦するところらしい。ツア



ーリーダーの鈴木謙介さんも元はロッククライマーらしく結構憧れたみたいだ。その話をするときには眼が輝いている。我らがオバサンたちの中にもロッククライマーがいるみたいで、話に花を咲かせている。こんなところを登ろうという奴らの了見が俺にはさっぱり理解できねえ。大陸のプレート同士がぶつかって、隆起したり潜り込んだりした地形に、さらに氷河が削り取ってこんな地形が出来たらしい。

ヨセミテ名物のもう一つに、セコイアの木に覆われた森がある。いろいろなタイプのセコイアの木を見ることができる。

最終日はサンフランシスコで、型どおりのゴールデンゲートブリッジ見物を行って帰国となった。



セコイアの木

